

〔巻頭言〕

大学としての図書館の整備の在り方

図書館委員長 長谷川 桂子

本学は平成12年4月に開学し、今年で10年目を迎える。大学の図書館はこの間に在籍した教職員の協力で順次整備がなされ、今日に至っている。

平成17年に文部科学省の科学技術・学術審議会学術分科会・研究環境基盤部会学術情報基盤作業部会が「学術情報基盤としての大学図書館等の今後の整備の在り方」の中間報告で、大学図書館は「高等教育と学術研究活動を支える重要な学術基盤であり、大学にとっては必要不可欠な機能を持つ大学の中核をなす施設」であり、「教育の側面からみると、大学の教育はそもそも教室における講義と、その前後における学生自らの学習を合わせて成り立つものであり、学生が図書館資料を活用しながら自ら学習する場」であると述べている。

開学時から本学の図書館は教職員の学術研究活動を支え、学生の自己学習を支援することを目指して、以下の4つを整備・運営の方針として掲げてきた。

- ① 高等教育機関に求められている学生の自立的課題探求能力の育成を図る
- ② 教員の教育・研究・実践活動をバックアップできる整備を行う
- ③ 図書館を一般開放することで学外者の生涯学習支援に寄与し、県下の看護の質の向上に貢献する
- ④ 本学の教育理念、特色が十分反映されるよう整備を行う

以上のような方針のもとに蔵書数は開学時17,000冊であったが、完成年度の平成15年度末には52,000冊、平成20年度末には76,800冊を数える。

学生の自己学習を支援するため、貸出頻度の多い図書は複数冊をとり揃え、シラバスに記述のある参考図書は可能な限り入手し、学生の希望する図書も基本的に整備している。図書館に学生が自由に活用できる自己学習スペースは確保されているが、冬季は寒く学生の自己学習環境として最適であるとは言えない。昨年度、図書館は暖房効果を上げるため一部の改修を行い、学生の学ぶ環

境を蔵書の充実だけではなくホスピタリティの面からも整えている。

教員には年2回、図書館が所蔵するのに適した図書などの選択を依頼している。教員の図書選択への協力には、学生の自己学習環境と教員の学術研究活動環境の充実に向けての図書整備の意味がある。蔵書数は前述のとおり増加しているが、洋書は開学時約3,500冊、平成20年度末5,700冊で、今後の教員の図書選択に大いに期待したいところである。

図書館では教員や大学院生の学術研究活動および学生の自己学習を支援するため、土曜日開館を平成15年度から開始し、平成18年度に開館時間を午後9時（通常期）まで延長した。看護にかかわる新刊書はできうる限り充足したいと考え、毎月、書店が選択して持ち込む新刊書から必要な図書を購入している。開館時間の拡大や確実に新刊書の入手は、教職員の学術研究活動や学生の自己学習環境の整備に貢献している。

教職員や学生の学術研究などの便宜を図るため、医中誌 Web をはじめとする7種のデータベースの導入と、和洋を合わせて400タイトル以上の雑誌をこれまで揃えてきた。しかし、洋雑誌の値上りや予算削減などの影響で、使用頻度を勘案して雑誌は減らさざるを得ない状況に陥っている。学術研究活動を支える図書館としては課題である。また、雑誌などの電子ジャーナル化が進み、今後の図書館の蔵書のあり方を検討する必要もある。

教職員は速いスピードで変化を遂げる医療にかかわる現場と、それにつれて変化する看護学教育や学術研究を取り巻く状況をとらえている。図書館もその変化を確実に捉え、敏感に対応できることが望ましい。変わりゆく社会の変化を捉え、常に教職員の学術研究活動と学生の自己学習を支えられるように、今後も教職員の協力を得て図書館の整備を進めていきたい。

(育成期看護学講座准教授)